

2024. 6. 1

現代俳句千葉

153号

巻頭エッセイ

創立45周年を目指して 会長 並木 邑人



令和二年から四年にかけてのコロナ禍による総会中止、近年の会員数減少及び物価高に伴う財政の立て直しに迫られ、窮屈な協会運営を余儀なくされましたが、この二年間は総会・俳句大会も予定通り開催することが出来、青年部や初心者俳句講座、俳句大会への高校生への部及び「いすみ安房研究句会」の創設など、将来への展望を明るくさせる活動が次々に生まれて来ています。

加えて本年一月の幹事会では、令和七年度以降、総会と俳句大会を分離開催し、俳句大会は秋に開催することといたしました。そして七年度が千葉県現代俳句協会の創立45周年に当ることから、俳句大会を記念大会とすることを決定したところです。記念大会への準備については、五月の幹事会以降順次整えていく所存です。

一方、財政の逼迫は容赦なく迫って来ており、会報「現代俳句千葉」

の縮減をはじめ、これまでの慣行をゼロから見直し、PCメールの活用などにより郵送費、消耗品費、旅費等通常経費の圧縮を計っているところです。

さて、コロナ禍の最中もそうでしたが、今の日本を取り巻く情勢は、年長者ばかりではなく若年者も含めた全ての世代に厳しい選択を突き付けています。地球環境の劣化や戦争の脅威のみならず、日常生活の中にも差別や中傷、虐待、暴力などがにじり寄ってきています。

一方、これらとは対極にある私たちの俳句は、敵を必要としない穏やかな生き方がベースにあり、平和裡に自然や人間のありようを描き出すものです。今こそ現代俳句協会の「俳句自由」の原点に立ち返り、会員会友の一人一人が創作に邁進するときだと信じて止みません。

千葉県現代俳句協会の長所は、活動の方向性を巡って大いに論争しますが、一度決めたことはきつちりと推進する結束力にあります。来年の創立45周年を目指して皆様のご協力をお願いいたします。

目次

創立45周年を目指して	並木邑人	1
令和六年度定期総会	2～3
令和六年度俳句大会	4～5
春の吟行会	6～7
諸家近詠	8～9
私の感銘句	10～11
津田沼研究句会報告	12
青葉研究句会報告	12
柏研究句会報告	12
君津研究句会報告	12
いすみ安房研究句会報告	12
強化部だより	13
会員・会友の近況	13～14
図書紹介・掲示板	14

千葉県現代俳句協会会報

令和六年度定期総会・俳句大会開催

令和六年三月十七日(日)、千葉市文化センターにおいて令和六年度定期総会・俳句大会が昨年に続き開催された。

羽村美和子幹事長の総合司会で、定刻十時三十分開会。徳吉洋二郎副会長の開会のことは、並木邑人会長のあいさつに続き、吉田耕史氏を議長に選出。総会は会員参加者四十八名、委任状一十七名で定足数を満たした。

来賓に東京都現代俳句協会幹事長今野龍二氏、東京多摩地区現代俳句協会副幹事長蓮見徳郎氏、神奈川県現代俳句協会会長芳賀陽子氏をお迎えした。大会後、「三井ガーデンホテル千葉」にて行われた五年ぶりの懇親会にはご来賓の三氏を含め、三十二名が参加。総会と俳句大会の成功を祝った。司会は東国人・白木暢子両幹事。ビンゴゲームなど楽しんだ。

定期総会

総会では五議案について審議され、いずれも可決。新会員の紹介のあと、長井寛副会長の閉会のことを以て終了した。



総会開始前



会長挨拶



ご来賓の
今野龍二氏



ご来賓の
蓮見徳郎氏



ご来賓の
芳賀陽子氏



新会員
煙陽さん



新会員
小林崑七さん



優秀賞
沼南高柳高校
金井琉輝亜さん



(写真撮影・遠藤寛子)

[第1号議案]

令和5年度事業報告

1. 行 事

(1) 定期総会・俳句大会

- ① 令和5年度総会 3月19日(日) 出席者 44名
会場：千葉市文化センター
 - ② 同上 俳句大会 同上
会場：同上
- *事前投句の部 応募数 1,068句
*当日席題の部 参加数 112句
*高校生の部 応募数 669句

(2) 吟 行 会

- 春の吟行会 4月29日(木) 参加者 68名
吟行地：中山法華経寺界隈 会場：船橋市勤労市民センター
- 秋の吟行会 10月29日(日) 参加者 53名
吟行地：史跡松戸「戸定邸」 会場：船橋市勤労市民センター

(3) 研究句会

- ① 津田沼研究句会 毎月第2火曜日 13時～16時
津田沼1丁目町会会館(2句事前投句) 12回実施
- ② 青葉研究句会 毎月第4木曜日 13時～16時
千葉市民会館(3句事前投句) 12回実施
- ③ 柏研究句会 毎月第2土曜日 13時～17時
柏市・ハックルベリー書店2階(当日投句) 12回実施
うち8月は柏市内柏神社周辺吟行、会場：アミューゼ柏5階
- ④ 君津研究句会 毎月第1木曜日 13時～16時
君津市生涯学習交流センター(3句事前投句) 12回実施

(4) 青年部活動

- 夏雲システムによる句会(あしたば句会)
1月29日(テスト)、3月26日、7月30日、9月24日
吟行会 5月9日(千葉公園)、11月18日(鎌ヶ谷手通公園)

(5) 初心者講座

- 4月15日開講 年10回(年度内8回済) 千葉市生涯学習センター

2. 幹事会等

定例幹事会

- 第1回 1月24日(火) 千葉市民会館
- 第2回 5月23日(火) 船橋市勤労市民センター
- 第3回 8月22日(火) 同上
- 第4回 11月21日(火) 同上

3. 会報の発行

- 第148号(3月1日刊)
- 第149号(6月1日刊)
- 第150号(9月1日刊)
- 第151号(12月1日刊)

4. 会員数等(令和5年12月31日現在)

会員 260名 会友 32名 計 292名

【主な異動】

* 入 会 26名

- 新会員(16名) 寺田 勝子 土井 探花 宮 たかし 鈴木比佐雄
豊崎まゆみ 富田 圭香 米村 静 村上 由香
小林 崑七 萱原 泰子 鹿兒嶋俊之 早乙女洋子
荻野由美子 池田 楠 渡邊マミヲ 煙 陽

転入会員(3名) 山本 隆之 高橋由紀子 松本 悦子

- 新会友(7名) 馬淵 津枝 横須賀弘子 佐藤 鮎美 菊地 喜己
山田たかし 羽矢 眞人 藤井 稜雨 藤井 稜雨

* 退 会 37名(会員 34名 会友 3名)

- 内、物故者 会員 5名 遠藤古都女 若林 佐嗣 永井 奈々 中里 結
玉山 政美

(3)

[第2号・第3号議案]

令和5年度の会計報告

[令和5年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位:円、%)

科目	予算額(a)	決算額(b)	対比(b)/(a)	摘要
俳句大会	555,000	586,000	106%	事前投句料 当日参加費
吟行会	100,000	126,000	126	春・秋2回
協会運営	600,000	592,741	99	本部よりの助成金、会友費
合計	1,255,000	1,304,741	107	

支出の部

(単位:円、%)

科目	予算額(a)	決算額(b)	対比(b)/(a)	摘要
総会	250,000	170,031	68%	
俳句大会	420,000	415,700	99	大会チラシ・作品展 高校生の部
吟行会	100,000	66,158	66	春・秋2回
会報発行	550,000	516,334	94	年4回
協会運営	300,000	220,705	74	定例幹事会4回他
強化部	30,000	8,675	29	会員増強 青年部
予備費	100,000	0	0	
合計	1,750,000	1,397,603	80	

次年度繰越金

(単位:円)

当年度収支差額	-92,862
前年度繰越金	1,538,625
次年度繰越金	1,445,763

財産目録

(単位:円)

普通預金	1,102,045	千葉銀行稲毛東口支店
現金	343,718	
合計	1,445,763	

監査報告書

令和5年度の会計及び事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正當に処理されていることを確認しました。

令和6年1月23日

監査役 矢野忠男
監査役 久野康子

[第4号議案]

令和6年度事業計画(案)

1. 行事

(1) 定期総会・俳句大会

- ① 令和6年度総会 3月17日(日) 千葉市文化センター
- ② 同上 俳句大会 同上 同上
(高校生の部含む)

(2) 吟行会

- 春の吟行会 4月21日(日) 会場:千葉市民会館
- 吟行地:千葉市動物公園
- 秋の吟行会 未定

(3) 研究句会

- ① 津田沼研究句会 毎月第2火曜日 午後1時より 津田沼1丁目町会会館(2句事前投句方式)
- ② 青葉研究句会 毎月第4木曜日 午後1時30分より 千葉市民会館(3句事前投句方式)
- ③ 柏研究句会 毎月第2土曜日 午後1時より 柏市ハックルベリー書店(当日投句方式)
- ④ 君津研究句会 毎月第1木曜日 午後1時より 君津市生涯学習交流センター(3句事前投句方式)

(4) 青年部活動

- 夏雲システムによる句会(あしたば句会)
- 1月21日 3月 9月
- 吟行会 5月 11月

(5) 初心者講座

- 第2期 4月20日(土)開講 年10回 千葉市民会館

2. 幹事会

- 定例幹事会 船橋市勤労市民センター
- 第1回 1月23日(火) 第2回 5月21日(火)
- 第3回 8月20日(火) 第4回 11月19日(火)

3. 会報の発行

- 第152号(3月1日刊) 第153号(6月1日刊)
- 第154号(9月1日刊) 第155号(12月1日刊)

4. その他

- ① 創立45周年記念大会(令和7年秋)実行委員会立ち上げ
- ② いすみ・安房研究句会(仮称) 3月24日(日) 足立予定

[第5号議案]

令和6年度予算(案)

[令和6年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位:円)

科目	予算額	前年度予算額	前年度決算額	摘要
俳句大会	550,000	555,000	586,000	事前投句料 大会参加費
吟行会	100,000	100,000	126,000	春・秋2回
協会運営	570,000	600,000	592,741	本部助成金 会友費
合計	1,220,000	1,255,000	1,304,741	

支出の部

(単位:円)

科目	予算額	前年度予算額	前年度決算額	摘要
総会	240,000	250,000	170,031	
俳句大会	416,000	420,000	415,700	チラシ・作品展 高校生の部
吟行会	85,000	100,000	66,158	春・秋2回
会報発行	590,000	550,000	516,334	年4回
協会運営	305,000	300,000	220,705	
強化部	37,000	30,000	8,675	会員増強 青年部
予備費	100,000	100,000	0	
合計	1,773,000	1,750,000	1,397,603	

次年度繰越金

(単位:円)

当年度収支差額	-553,000	-495,000	-92,862
前年度繰越金	1,445,763	1,538,625	1,538,625
次年度繰越金	892,763	1,043,625	1,445,763

令和六年度俳句大会

後援

千葉県教育委員会・千葉市・
毎日新聞社・千葉日報社・
朝日新聞社千葉総局

事前投句の部及び高校生の部の表彰が並木
邑人会長により行われた。事前投句の部の成
績発表・披露は高橋健文俳句大会委員長、高
校生の部は高橋宗史高校生の部実行委員長に
より行われた。

席題の部は午後一時に、高橋健文副会長の
開会のことばで開始された。参加者は来賓の
三氏を含め六十三名。披露は越野雄治幹事・
星野一恵幹事・下村洋子幹事が担当。進行は
講評・表彰を含めて予定通り進み、木之下み
ゆき副会長の閉会のことばで終了した。
俳句大会の成績は左記の通り。

【事前投句の部】

へ入賞者作品へ

● 千葉県知事賞

たましいのはじめのみどり芹薺

清水 伶

● 千葉県現代俳句協会賞

一月の一の字肩が凝っている

羽村美和子

● 千葉市長賞

退屈が象の背中に降りて春

蛭名 節昌

● 毎日新聞社賞

日の落葉月の落葉と掃き寄せる

森 孝子

【高校生の部】

へ入賞者作品へ

● 千葉県現代俳句協会会長賞

青りんご知識の果実熟れなくて

鎌ヶ谷高校 長野 光希

● 俳句大会委員長賞

凧や持久走後の木乃伊たち

柏中央高校 伊藤 晶

● 俳句大会実行委員長賞

先輩の青春残る椅子机

長狭高校 加藤 獅扇

【席題の部】 席題 「陽炎」「面」

へ入賞者作品へ

● 千葉県現代俳句協会会長賞

陽炎や地球が浮いている不安

前田 孝子

● 千葉県教育委員会教育長賞

自画像の片面がないリラの冷え

池田 博臣

● 朝日新聞社千葉総局賞

B面へカチャリと替わり卒業す

遠藤 寛子

へ特別選者特選句へ

(並木邑人特選)

陽炎を分けてやるよとゴリラの背

松本 千花

(今野龍二特選)

陽炎に深入りしすぎ大火傷

國分 三徳

(蓮見徳郎特選)

陽炎としばらく夢を語り合う

秋尾 敏

(芳賀陽子特選)

陽炎や監視カメラは作動中

小川トシ子

(秋尾 敏特選)

陽炎や半音階をさまよえり

芳賀 陽子

(高木一恵特選)

正面にミモザの花を合葬墓

並木 邑人

(渡辺 澄特選)

陽炎や縦に首振る重さなり

蛭名 節昌

(高橋健文特選)

卒業す木偶の仮面を付けしまま

星野 一恵

(高橋宗史特選)

自画像の片面がないリラの冷え

池田 博臣

(徳吉洋二郎特選)

陽炎や半音階をさまよえり

芳賀 陽子

(長井 寛特選)

陽炎や地球が浮いている不安

前田 孝子

(木之下みゆき特選)

踏み込んで桜はばつと面一本

東 國人

(羽村美和子特選)

かげろうや育児休暇のパパに羽根

石井紀美子

へ四位く二十位入賞者作品へ

夏蜜柑のような面して恋敵

小林 実

十一面観音十一の春愁

高橋 健文

卒業す木偶の仮面を付けしまま

星野 一恵

仮面の目のぞけば春の流星群 かげろうや育児休暇のパパに羽根 縦掛ける横が面積鴉の巣 花は葉となり少年の面構え 春眠をはみ出して猫の面 陽炎や半音階をさまよえり 陽炎の影も形も遊女なり かげろうふやもう延命は無用です 陽炎としばらく夢を語り合う 陽炎やかつて鉄路のありし道 踏み出す一歩陽炎の交差点 陽炎の向うのひとは多面体 正面にミモザの花を合葬墓 陽炎や縦に首振る重さなり	羽村美和子 石井紀美子 吉岡 一三 小川トシ子 徳吉洋二郎 芳賀 陽子 大見 充子 上野 紫泉 秋尾 敏 岡田 春人 山口 明 平岡 育也 並木 邑人 蛭名 節昌	塩むすび欲す掌陽炎へり 陽炎へる古代のままの石舞台 裏面知りたくもなし春うらら 陽炎と同化するまで独りなり 憲法記念日ひよつこ面の眼がおちて 進学す仮面ライダー好きのまま 陽炎やぼんぼん時計急に鳴り 真実を照らしつつ陽炎へる海 陽炎の中に微笑む過去の日々 かげろひて城はやさしき高さ持つ 百代の夢がかげろう青年部 両面のコピーー新人歓迎会 陽炎のごとく余生を送りたし 面会はひ孫を膝にヒヤシンス 捕虜の絵の面は骸骨冬凍てる 蜃気楼仮面の下は聞かないで 正面の議長桜に華やぎて 陽炎へる奈良公園の奥の奥 葉面の気孔に春の光あり 花疲れ三面鏡に喜哀衆	長井 寛 鈴木まんぼう 置鮎 勝美 下村 洋子 鈴木 瑩子 三宅たくみ 越野 雄治 白木 暢子 川上 典子 加藤 法子 西崎 久男 岡田 翠風 池田 幸 石井 稔 吉田 耕史 佐藤 鮎美 野口 京子 増田 豊子 森井美恵子 蓮見 徳郎 高木 一恵 小林 岳七 保坂 末子 高橋 博 高橋 宗史 山崎 幸子
--	--	--	---

〈その他の作品〉

黙禱の中の面影亀の鳴く
面倒はかけあうものよ座禅草
陽炎よ私の轍消さないで
誰彼と仮面つけたる花の冷え
面通し「それは私の四月馬鹿」
命ある限り青春陽炎えぬ
旧友の手紙に貼ってある陽炎
陽炎や酸素が不足しているか
春寒や面一本のあと三歩
水面に目の半分を初蛙

飯島 豊



和気藹々と懇親会



(写真撮影・森井美恵子)



事前投句の部 入賞
羽村美和子さん



選 句



席題の部 第一位
前田孝子さん



点 盛

花篝仮面はずせば日本人
全面戦争全面解決全芽吹く
陽炎や八十年の徒歩疾駆
かげろうのたちのぼりゆく津田沼は

今野 龍二
重田 忠男
長濱 聰子
加藤 圭子

春の吟行会

千葉市動物公園

会場 千葉市民会館 令和六年四月二十一日(日)



動物公園中央広場

広い園内を歩くと汗だくである。後から知ったが、天気予報によると、夏日だったという。ここは、二本足で人間のように立つ、レッサーパンダの風太くんが有名。しかし年齢は今年二十一歳。人間で言うところと八十歳を大きく超えているという。私は風太くんに会いたくて、最初にレッサーパンダ舎を訪れたが、暑さも相まって、姿を見ることが出来なかった。ただ、後継者(?)は順調に増え、園内だけでなく、多くの動物園で活躍しているという。

吟行会当日は、

正門ゲート十時集合。集合時には小雨が降り、お天気が心配されたが、

吟行時は曇りになり、楽しく動物園の中を散策することが出来た。ただ、蒸すような暑さ、

当日、実際に動物園をまわった出席者は三十六名、欠席投句は十二名。計、四十八名の大盛況の句会となったのは、喜ばしい。

高句句は

万緑や人の愚痴聞く象の耳 長井 寛

縞馬の尻が主張をして若葉 蛭名節昌

万緑へ踏ん張って鳴く手長猿 小川トシ子

人間に見えない鎖昭和の日 長濱聰子

ブレゼンは春の咆哮手長猿 山口 明

など。

動物園に入るとすぐに、八重桜の華やかさと、賑やかなフクロテナガザルの吠え声が迎えてくれた。

原罪のゴリラは春を黙しけり 下村洋子

俳諧の心髄を知るゴリラの眼 長井 寛

ざっと数えたのだが、ゴリラを詠んだ句は全体で十三句。四人に一人がゴリラを詠んだことになる。ハシビロコウとライオンがそれに続いて多かった。やはり、人気者である。

私は受付など当日当番があつたので、早く

百獣の王様



フクロテナガザル



動物園を出るつもりだったが、意外と園内が広く、万歩計は一万五千歩を越えてしまった。参加者も概ね一万歩を越えて歩いていらつしやると思うのだが、皆さん元気。

一時二十分から受付開始。投句は嘯目二句、句会場は千葉市民会館三階特別会議室2。

十四時、並木邑人会長から挨拶。選句を経て披講に移った。今回は点盛りと採点の方法がいつもと違い、時間が掛かってしまったが、表彰を経て無事に終了。十七時、解散となる。

※千葉県現代俳句協会会員も、皆年齢を重ねているので、吟行に参加も難しくなったという方もいる。また、近隣での吟行もどうかという声や、もっと別の吟行地を見たい、などという声もある。これからの吟行会を如何にするかという意見は、千葉県に限らず、他区にも広がっているのではないか。考える余地は多々あると思っている。

森須 蘭記(写真撮影・森井美恵子)

〔一位〜二十位入賞者作品〕

(二句のうち一句掲載 点数は二句の合計)

- ① 俳諧の心髄を知るゴリラの眼 長井 寛
- ② 縞馬の尻が主張をして若葉 蛭名 節昌
- ③ 人間に見えない鎖昭和の日 長濱 聰子
- ④ 春惜しむハシビロコウはアートです 松本 千花
- ⑤ 春の風人を見飽きしゴリラかな 岡田 春人
- ⑥ 万緑へ踏ん張って鳴く手長猿 小川トシ子
- ⑦ 春の鬱あるとするならゴリラの背 黒澤 雅代
- ⑧ 原罪のゴリラは春を黙しけり 下村 洋子
- ⑨ 動物園出て葉桜の人となる 徳吉洋二郎
- ⑩ プレゼンは春の咆哮手長猿 山口 明
- ⑪ 風船を持たされハシビロコウの前 高橋 健文
- ⑫ ハイエナ無職幻影の夏野 秋尾 敏
- ⑬ 首長をなげく麒麟に春の風 吉田 耕史
- ⑭ ハシビロコウ狙いは初夏のパッション 羽村美和子
- ⑮ 檻中の焦燥つづく青葉闇 木之下みゆき
- ⑯ 春愁針ねずみの石枕 矢野 忠男



夏日燦燦
麒麟も退散



選句

- ⑰ 昼寝して猿は悪夢を食ふ頃か 越野 雄治
- ⑱ ニシゴリラの静かな食事花曇 佐藤 禎子
- ⑲ 猿山の元気なお尻春の昼 保坂 末子
- ⑳ 命の賛歌トーテンポール夏へ 森井美恵子

〔特別選者特選句〕

(並木邑人特選)

- 俳諧の心髄を知るゴリラの眼 長井 寛

(高橋健文特選)

- 俳諧の心髄を知るゴリラの眼 長井 寛

(高橋宗史特選)

- 縞馬の尻が主張をして若葉 蛭名 節昌

(徳吉洋二郎特選)

- 八重桜孤高のゴリラ座禅組む 高橋 博

(長井 寛特選)

- 原罪のゴリラは春を黙しけり 下村 洋子

(木之下みゆき特選)

- 命の賛歌トーテンポール夏へ 森井美恵子

(羽村美和子特選)

- 春惜しむハシビロコウはアートです 松本 千花

(秋尾 敏特選)

- さようなら駝鳥の耳は春の闇 遠藤 寛子

(高木一恵特選)

- ハイエナ無職幻影の夏野 秋尾 敏

〔その他作品〕

- クローバーの真中チーター仁王立ち 森須 蘭

なまけもの記憶限界花は実に 山崎 幸子
 たかんなの一本伸びる動物園 伊与田すみ
 行く春やゴリラは瞳閉じしまま 星野 一恵
 木の芽風フクロテナガザルのファルセット 三宅たくみ
 エミユウしづ翼をひろぐ春われに 高木 一恵
 吼えるライオン春愁を蹴り上げる 並木 邑人
 啓蟄やへビクイワシの太き足 大庭 芳郎
 さりん同志首を絡める春深し 増田 豊子
 花馬酔木こかげに寄りて紅を引く 鈴木 瑩子
 若葉下ゴリラの孤独まねて食う 高橋 宗史
 アイス舐め考へる人コウノトリ 土肥 勲
 なまけもの人の付けし名若菜食む 川島 里子
 轉りや石舞台めく獅子の寝間 鹿兒嶋俊之
 叫び合うテナガザル春開けるとき 高野 義康
 麗かや掌にある動物園 加賀谷秀男
 耳孔なき蛇如何に愛語りあふ 小林 崑七
 春惜しむキリンの声は細細と 小野 功
 誰でも檻へ花冷えの動物園 池田 博臣
 昼の月うすつべらとは言わないで 山崎 政江
 春風に誘われ開く孔雀の尾 菊地 喜己
 行く春を反芻しているよキリン 石井紀美子
 もてあますキリンの首や春惜しむ 大藪 智子
 春らんまん鬱のゴリラとすずめの自由 小林 実
 ライオンの干されたままや春の雲 横須賀弘子
 春来たよ風太よ風太こつちみて 山崎 公子

諸家近詠

耕運機海も耕す気配かな

スクランブル交差点赤鳥雲に

法然忌とことこ不整地運搬車

試行するセグウェイポプラは絮飛ばし

片岡 秀樹

終章に未だ間のあり桐一葉

綿飴は施設の御八つ小鳥来る

人民はいつも犠牲や流れ星

三本の輸液の落差冬の夜半

内田 庵茂

被災地の子どもら雛の泥洗ふ

古池や小雨の夜の糸桜

碧落へ卒寿の桜舞ひ上がる

裏庭の荒れし古民家露の臺

高橋 節夫

若水の鎮まりて山映りくる

もりあがる黄身の張力寒卵

鯛焼の袋のぬくみ胸もとに

いつせいに風をとらへて風車

多胡たかし

白馬の輪廻アヒンサー

まわり道敢えてしてみる春疾風

分断は春塵に舞うシヨールの弧

「またひとがしぬ」ラッパは春に

島田 翠松

霜月三十日葛根湯と絆創膏

いわし雲おのれ励ます風の中

言問を渡りきる時虹二重

デジタルの都会は積木鮫く

鈴木 瑩子

国境の愛ある所路の臺

ねこやなぎ君とおんなじ手の温度

山の上ホテル惜春の鐘が鳴る

いきなりの階段夏の入り口

篠田 京子

明日葉や二千歩までの足馴らし

石楠花の寺に移した住民票

鉦叩き明日を伸ばす検診日

佗助や小銭合わせの童歌

澤田 寿一

白木槿死よりも老いを恐れをり

煩惱の捨て所なく懐手

極楽でも地獄でもなく日向ぼこ

大賀蓮ポンと音たて背筋たて

鈴木まんぼう

春光あまねしわが残生の雑木山

AIの軽やかに曳く蜘蛛の糸

柚子ふたつ縋帯上手の祖母と母

生きてると能登枯露柿の便りかな

高木 一恵

気が付かぬ背中合わせの春愁ひ

流れ星言葉の隙間抜けて消え

山頂に石ひとつ積む我の秋

波の音にこり寒さの匂ひ来たり

小林 崑七

雪暗や終の栖にストレッツチ

水漬をふきつつ乾隆帝の話など

料峭の鳥の骸もやがて土

黙想す朱欒の尻に手を当てて

渡邊マミヲ

菜の花のまどろみに似て死もありぬ

尾の記憶微かにありてみどりの夜

自画像をはがせば見える大花野

雪催い匂い立つまで刃物砥ぐ

下村 洋子

ヒヤシンス古いピアノを歌わせる

静脈の透けている母花樽

ねむ咲いて空家復活プロジェクト

訪えば小さく応う白木槿

佐藤 禎子

逃水を追い鏡の中の母系

夏銀河いつもどこかで壺こわれ

永劫の父の号泣夕ひぐらし

寝返るに白葱一本の力

高橋 公子

桜葉降る真夜中の非常口

黒揚羽一頭ひそむ水琴窟

実むらさき声だすものに群鷄凶

月光の投網のかかる枯蓮

坂間 恒子

原点に帰る他なき裸木よ

福茶飲むかすかに残る母系の血

下萌や幼心をくすぐりぬ

退屈を持って余しおり夜の雛

菅ノ谷文子

万緑のみどり吸い込むヨガ呼吸

腕の蚊はO型血液好きらしい

みどりの夜死の臭いあるぬいぐるみ

海中の海女半身は魚類めく

田沼美智子

清水 伶

春光のなかの野鯉や兜太の忌
永遠に春の暮なり土星に輪
たましいのはじめのみどり芹齋
王女のひかがみを出て瑠璃蛺蝶

塩野谷 仁

轉りのなかあざやかな人嫌い
全開の深夜のシャワー春愁い
引力の薄らぐあたり葱坊主
瞳をひらく人形八十八夜寒

柴田 洋郎

一盞に桜蔭ふる昼の宴
昼酒の醒めて見に行く夕桜
小上がり息吹き返す花疲
見をさめは何時と判らぬ桜かな

鹿兒嶋俊之

右いち川左行とく春疾風
雛の日や寺の広間の演奏会
野の小道轍をなぞる耕耘機
城あとの捌め手の坂桜人

里見 さち

はこばれて鍋焼うどん未だ滾る
立春のきれいに剥がす包装紙
孤独とは違ふ不安の春愁ひ
安心の二文字春の灯をおとす

小林 実

コーヒー一杯そろそろ董咲く頃か
抽象で描けと鮫鱈が口ひらく
もの云えぬ国の怖さよ引鶴よ
猫二匹我を無視して桃の花

五味ちひろ

雪しんしんフランス積みの赤レンガ
陽だまりのあれは髑髏の雪だるま
啓蟄や男ばかりの京都弁
保育士のエプロンはなす初つばめ

近藤 幸子

鶯や森のふところ透き通る
竹の秋風の飛ばせし竹とんぼ
花満開散り行く花と残る花
竹の穂に風ささやけり諾へり

高桑婦美子

八月の空から落下千羽鶴
だんまりの民に夏空また落ちる
たかが人権たかがを口に夏氷
覚醒は覚悟に続く八月尽

佐藤 浩子

青空は海底のやう榎植の実
冬めくや佛前の父母拜しをり
日曜日高き低きに白椿
春宵や家人と語る刻多し

鈴木 一行

雪が降る迷彩色の戦場に
灰色の街の真冬のしゃぼん玉
寒鯉の捌かれていく重さかな
冬霧の中へ行運してゆけり

高野 春子

ピアニカと体操服と春一番
手を貸して欲しいジゴクノカマノフタ
袖いつも濡れていた母芋の露
零余子飯ほろり体幹整へる

鈴木 房州

吊るし雛褒めつつ脈をとるナース
婦長室机にぼつんと花すみれ
花吹雪舞ふや胴上げの花婿
変わり身の早さあつばれ猫の恋

佐藤 直子

耳もとで風の口笛クリスマス
覚醒の時間短し福寿草
誕生日忘れた母に花衣
花盛り人の歩調で流される

重田 忠雄

春一番死ぬまで続く締切日
実印のうすき印影除夜の鐘
太陽を抱きて果てる油蟬
山頭火語る澄太師夕時雨

高久 清美

視野なべて黄金のさざなみ花ミモザ
白椿落ちて天向く矜恃あり
轉の和して同ぜず夕くれなる
さくら散る泰斗晶子の歌数万

杉山真佐子

目を癒す水若水となる朝
溺れるによく息つぎのない氷菓
鬼灯の順に下がるは音階めく
乗り継ぐや金木犀の二系統

早乙女洋子

星たちの語る震災三月来
あと九十秒の終末時計露を煮る
夫の旅いまだ続けりかひやぐら
竹林の火箭に熊谷草の母衣

私の感銘句

高橋 宗史 作者名 号頁

ランポーを撃つヴェルレーヌ冬の薔薇

氷点の水に漲る力かな

修羅の世に牧師が蒔くやからし種

首脳会議長い廊下の寒気団

仏みな正面を向き夏開くる

綿の桃こんなに吹いてましろけれ

裂け石榴人に自白の慣いあり

仏みな正面を向き夏開くる

正面を向いた仏はみな静かで優しく衆生を包みこんでくれる。横顔に厳しさを感じさせたりもするけれど。夏の深まる中、作者はその静謐に己が生を思ったに違いない。(作者は昨秋不測の事故でお亡くなりになった。合掌)

荒木 洋子

風花や物思いげな猫の髭

川の洲の身ごもる容して立夏

みちくさのあとはスキップ花胡瓜

少女期の小箱に詰めた虹はいま

断崖の奥へ奥へと滴らす

春屋のエゴン・シーレという発火

手のひらの力を抜いてひなあられ

遠藤 寛子

二階には二階の時間鱗雲

敗戦日這ひつくばつて畳拭く

寒波来る遠近法でやつてくる

坂間 恒子 148 2

椎名 鳳人 148 3

鈴木 房州 149 9

長濱 聰子 150 3

中里 結 150 4

山中 葛子 151 4

山中 葛子 151 4

実籾 繁 151 4

中里 結 151 4

島 隆史 149 8

田村 隆雄 149 9

富澤さち子 149 9

富澤ムツ子 150 3

袴田 菊子 150 5

林 ゆみ 151 4

松澤 伸佳 151 4

佐藤 禎子 148 4

神作 仁子 148 4

徳吉洋二郎 149 8

森一つ消えハロウィンがやってきた
拾ふなよその手袋につかまれる
清拭の熱いタオルや木の芽風
父の日の醬油をはじく目玉焼き
敗戦日這ひつくばつて畳拭く

窪田 俊作 149 10

浪岡 玄 150 4

林 ゆみ 151 4

村田 珠子 151 5

神作 仁子 151 5

私は昭和後半生まれ。学校の上映会は反戦映画、課題図書は反戦の本、と事ある毎に反戦の精神を刷り込まれた。今日、歳を重ねて思う。あの頃はまだ戦後だったんだと。そして未来永劫反戦を語り継ぐ事無しに平和は無い。

浦野 五郎

極月の水を見ていることが旅

二階には二階の時間鱗雲

帆梅のたましい抜けてゆく香り

青嵐四股踏むように嬰歩く

拾ふなよその手袋につかまれる

昭和の日昭和を削る乾物屋

はつ夏の風や胡坐のヨガ講師

上野 紫泉

白菜をひらけば屋の渚なり

後より足音が来る十二月

水馬円周率を抜け出せず

半身を昭和に埋め花牛蒡

八十の真つ只中の落し文

ガサツと落葉わたしが落ちて

ふたりです空想老人の晩夏

ふたりです空想老人の晩夏

老人夫婦の話はまだまだ前向き、この先を

プラス思考に、暑い夏を越える力となっている。空想であっても過去に生きるより逞しさを感じる一句、楽しくなります。長生きしましょう。

高野 春子

冬銀河すべての電車佇まる駅

影さして蝶がひとりじゃないという

寒素振りあけばの杉の心幹へ

葎切や坂東太郎真つ平

塔持たぬ遊牧の民雲素秋

スタジアムに蜻蛉一匹生きる場所

しあわせな猫が編みだす小春かな

馬淵 津枝

転生の星座を描き山眠る

日向ほこ遠き記憶にけもの道

さくらんぼ揺れているのは地球です

背骨にある秋刀魚の矜持波の音

コロナ禍と戦火網み込む糸玉

下総のかぶ畑より欠けし土器

真言の大本堂を寒という

重田 忠雄

敗戦日這ひつくばつて畳拭く

青空に届く夏野や草千里

寒波来る遠近法でやつてくる

狐火の誘いに原発再稼働

夏蝶や何処にもゆかず誰も来ず

昭和の日昭和を削る乾物屋

父の日の醬油をはじく目玉焼き

塩野谷 仁 148 3

佐藤 禎子 148 4

岡田 春人 149 9

菅ノ谷文子 149 9

浪岡 玄 150 4

矢野 忠男 151 4

村田 珠子 151 5

久野 康子 148 2

岡田美美子 148 4

長井 寛 149 8

中村 冬美 150 4

星野 一恵 150 4

羽村美和子 151 4

山中 葛子 151 4

山中 葛子 151 4

塩野谷 仁 148 5

直江 裕子 149 9

高木 一恵 149 9

鈴木 一行 149 10

木之下みゆき 150 4

森井美恵子 151 4

森須 蘭 151 5

小野 功 148 2

近藤 栄治 148 3

徳吉洋二郎 149 8

片岡伊つ美 149 8

中山 皓雪 150 4

浪本 恵子 150 5

細根 栞 151 6

神作 仁子 148 4

小多田文子 149 8

徳吉洋二郎 149 8

鈴木まんぼう 149 9

袴田 菊子 150 4

矢野 忠男 151 4

村田 珠子 151 5

伊与田すみ

極月の水を見ていることが旅
もの忘れするたび春の近づくか
青柿や俳句とは捨て台詞なり
プーチンへエーデルワイスの涙哉
物物交換漬物石で栗貫ふ
スタジアムに蜻蛉一匹生きる場所
晩学や遅々と進まぬたらい舟

長濱 聰子

白菜をひらけば昼の渚なり
太陽の消印ひとつ黒揚羽
脱皮後の少女はさくら吹雪かな
青氷柱わがうすずみの肺ふたつ
月光の梯子を降ろせ国境
行く秋の漂泊という途中下車
明易の湖心に濡れる櫂の音
白菜をひらけば昼の渚なり

飯塚 宣子

筒抜けの密談冬の白牡丹
父がいる野菜色した寒夕焼
物言いの鋭角になる寒い夜
あれこれと認知症問う春の雪
百までは無理です無理です揚花火

塩野谷 仁 148 3
高橋 健文 149 8
並木 邑人 150 3
木之下みゆき 150 4
増田 豊子 151 4
森井美恵子 151 4
村上 澄子 151 5
久野 康子 148 2
清水 伶 148 3
小林 実 148 3
下村 洋子 149 8
羽村美和子 151 4
細根 栞 151 4
馬淵 津枝 151 4
久野 康子 151 4
瑞々しい白菜を半分に分った時の驚きや喜び
の声が聞こえて来るような句です。
「昼」は「光」を「落」は「音」まで伝え、き
らきらと眩しいさざ波の寄せる汀へ誘ってくれ
ました。研ぎ澄まされた感性に拍手です。

秋冷のときどき歪む水鏡

金 蘭

美しき箱すてられぬクリスマス
月光の投網のかかる枯はちす
天網の破れぐるぐる巻くマフラー
修羅の世に牧師が蒔くやからし種
スタジアムに蜻蛉一匹生きる場所
太宰治と自転車が好き青みかん
パールピアスわざと忘れてアマリリス

小川トシ子

処方薬なし風船に若い息
太陽を懐に抱くチューリップ
人生の午後は静かに龍の玉
天高し明日歩くため今日歩く
ゆく春の火種のひとつ消しきれず
花デイゴ赤く涙の乾くとき
デジタルの波にさまよう黄落期

飯島 昭子

大根煮るたましいという大荷物
生かされてみな右を向き葱坊主
冬の朝木もれ日仰ぐいのちかな
人生の午後は静かに龍の玉
香りせぬ薔薇増ゆ仮想通貨の世
戦争は虚構の末路枯れ蓮田
月見草死にたくなって死の話

増田 元子 151 5
政成 一行 151 5
里見 さち 148 2
坂間 恒子 148 2
川守田美智子 148 3
鈴木 房州 149 9
森井美恵子 151 4
松本 千花 151 5
豊崎まゆみ 151 7
興津 恭子 148 4
長井 寛 149 8
鈴木まんぼう 149 9
長濱 聰子 150 3
中村 冬美 150 4
松村 五月 151 4
村上 澄子 151 5
塩野谷 仁 148 3
小川トシ子 148 4
近藤 幸子 148 4
鈴木まんぼう 149 9
津高里永子 149 9
野口 久 150 3
馬淵 津枝 151 4

川上 典子

秋うらら娘のやうな嫁とゐる
管楽器弦楽器柿の鈴なり
弥生への発語とと思う森の私語
何を奪いにぶうらんこ翔けのぼる
流るるも澱むも水に秋立てり
プーチンへエーデルワイスの涙哉
手のひらの力を抜いてひなあられ
弥生への発語とと思う森の私語

澤田 寿一

仲春から晩春にかけて感じられる、音無き森
のざわめきは、森の私語だったのでね。森の春
の目覚めを美事な詩情で詠んだ一句だと思えます。

ドリブルや辿り着きたる大晦日
半導体不足白鳥首伸ばす
蠟梅のたましい抜けてゆく香り
かみあわぬ会話も楽しとろろ汁
健やかな脳で新涼の扉を叩く
手のひらの力を抜いてひなあられ
マフラーを結び夜景を取り戻す

杉山真佐子

なまはげのひとり金髪あそび藁
夕ひぐらし魂たまはげいつ開け放ち
今も待つわたしのゴドー木の葉髪
竹皮を脱ぐ幼へ言葉ほぐしつ
何を奪いにぶうらんこ翔けのぼる
手のひらの力を抜いてひなあられ
深秋の溪谷幽しチパニアン

岡崎 翠 148 2
久野 康子 148 2
田村 隆雄 149 9
藤田 富江 150 4
野口 京子 150 4
木之下みゆき 150 4
松澤 伸佳 151 4
田村 隆雄 151 4
國分 三徳 148 2
興津 恭子 148 4
岡田 春人 149 9
浪本 恵子 150 3
木之下みゆき 150 4
松澤 伸佳 151 4
山崎 政江 151 5
久野 康子 148 2
清水 伶 148 3
小野富美子 149 8
中村 博子 150 3
藤田 富江 150 4
松澤 伸佳 151 4
実籾 繁 151 6

津田沼研究句会報告

●第三七七回(令和六年二月十三日)

(於：津田沼一丁目町会会館) 司会 長井 寛

冬帝の杖をおとせし日本海 鈴木 瑩子
溼東綺譚遣らず行かずの軒水柱 長井 寛
新開地枯尾花見て右折です 股野 久子
雪の下の水が囁く山河かな 小林 実
春の雪幸せそうな野猿の湯 村上 澄子
山眠る小さい主語を使うこと 白木 暢子
凍て果つる有為の奥山ガリヤ湖 並木 邑人
狼の遠吠え兜太の忌近し 徳吉洋二郎
手を打てば龍の雄たけび寒早 池田 博臣
冬銀河人は死なない国に行く 増田 豊子
助浮く犬猫ありて能登の雪 栗原 正子
縄文の鬼は一つ目春の雷 高木 一恵
故里のうからやいかに春の雁 星野 一恵
降りしきる雪の霹靂囃子かな なかもと淑子

青葉研究句会報告

●第一五一回(令和六年三月十八日)

(於：千葉市民会館) 司会 長井 寛

俳諧に継続ありて蒨の臺 長井 寛
朝ドラの続きどきどき春浅し 山崎 幸子
憲法記念日昭和平成令和厭く 加賀谷秀男
氷点を越えず濡らす春の水 越野 雄治
神を搏つ虫出しその他ゴジラなど 並木 邑人
散るほかなし一本の城桜 徳吉洋二郎
少年の眼まつす木木の根開く 池田 博臣
春うらら厄介ごとは雲の上 横山 郁子

柏研究句会報告

●第一三八回(令和六年四月十三日)

(於：柏市ハックルベリー書店) 司会 長井 寛

啓蟄や私も出そうペロリ舌 栗原 正子
弥生尺影を濃くして大げやき 矢野 忠男
片手挙げ「やあ」と埴輪の長閑けしや 鈴木まんぼう
地面師を匿ふ国やクロッカス 森井美恵子
一天の無垢にミサイル・戦火・霾 長濱 聰子
運鈍根なにかが欠けている隴 石井紀美子
鐘あれば撞く春なれば春の音 岡田 春人
篠笛の一管添わす桜の夜 野口 京子
時を濾過して野うるしの春が来る 山口 明
花ぶき離別の電車到着す 高橋 宗史
春一番フォルテで始まる前奏曲 川上 典子
漱石と子規の友愛すみれ草 藤好 良
戦争の遠く遠くにさくらさくら ガザ空爆苺潰せば赤みどろ 小野 功
この星に痴のあり春田打つ 椎名 鳳人
春分や三色牡丹餅三姉妹 長井 寛
少年に巣箱の卵耽美的 佐藤 鈴子
木之下みゆき

君津研究句会報告

●第四十八回(令和六年四月四日)

(於：君津市生涯学習交流センター) 司会 長井 寛

正論に塞がれし道おぼろ月 田沼美智子
種選たねやの葉缶鳴いて沸く 加藤 法子
花は葉に姿勢正して出直すか 泉 志眞子
種を蒔く叶わぬ夢の種加え 森 孝子

いすみ安房研究句会報告

●第一回(令和六年三月二十四日)

(於：勝浦駅前ふじや 十二時) 司会 高橋 宗史

桜しべ面会終えし肩に降る 小澤 富子
ものの芽の庭無伴奏チエロ・ソナタ 馬淵 津枝
家系図の沸点にいる揚げ雲雀 石井紀美子
花どきの果てなき戦鼎沸く 長井 寛
裏金の疑惑沸沸轟くもり 前田 幸子
流水や番屋沸き立つ艶話し 山田たかし
ふきのとうのぞき見しつゝ出番待つ 村田 満枝
沈黙の瓦礫の町の迎え梅雨 羽矢 眞人
煮沸しても食えぬトランプ山焼す 並木 邑人
風のリピート沸騰の花菜畑 長濱 聰子
野遊びの彼のみそつかす今日傘寿 大地 節子
平和を思う沸点しやぼん玉 佐藤 鮎美
館内沸く判官鬘辰春場所 古賀 壽昭
雉鳩のよくなき日なり鷹女の忌 徳吉洋二郎
鋭声あとの若き雉子の狼狽 越野 雄治

いすみ安房研究句会報告

●第一回(令和六年三月二十四日)

(於：勝浦駅前ふじや 十二時) 司会 高橋 宗史

裏切りのまへの目配せ椿落つ 鈴木卯ノ花
春の陽を嘴の払いに鳥のボブ 徳田 悠子
春鷗漁港はあくびかみしめる 坂間 恒子
さくらさくら私の筏次男漕ぎ 河原 清江
芒漠と山鳩を聞く花の昼 柴田 洋郎
谷戸行けば花が無言を敷きつめて 政成 一行
種芋に芽の出ているいすみ安房句会 東 國人
春の雪前世の底が抜けている 羽村美和子
明日よりも今日が好き開花宣言 白木 暢子
桜花爛漫騎手はやさしく駒に触れ 高橋 宗史
堅香子へ組み行く素数的媼 並木 邑人

強化部だより

いすみ安房研究句会報告

昨年十月以来準備されてきた研究句会が、わが房総半島の東・太平洋側にも誕生した。強化部の高橋（宗）、東を中心にすすめてきたものだが、二〇二四（R6）年三月二十四日に最初の研究句会が催されたもの。当面当地の方七名と高橋の八名であるが、さらに仲間を増やして研究していきたいものである。

会は、緩やかに自由なが motto。当日は、千葉方面から並木会長、羽村さん、白木さんが会の出発を祝しながら参加、大いに盛り上がった句会になった。次回、第二回は五月二十六日（日）。第一回と、同じ場所で同じ時刻より開催します。

（高橋宗史 記）

第五回あしたば句会（三月開催）

革命のなくて春塵つもるつもる 羽村美和子
 さくら貝純情運用特区です 松本 千花
 ブツカバパーすこし毛羽立ち春暑し 青野 友香
 三面鏡の一面にある春愁 石井 浩美
 わたくしを値踏みする猫春ひなた 遠藤 寛子
 春満月本意のことばすれ違ふ 森井美恵子
 春塵に押され退院致します 陸野 良美
 ホワイトデー思い出せないパスワード 徳吉洋二郎
 春塵の過ぎ行きテエロのクル・レーニョ 三宅たくみ
 隠されし聖母のみ足春の塵 石井 稔

黒板の溝にチヨークの粉三月 東 國人
 牡丹紋厨子はあちゃんの手触りの 並木 邑人
 地球如何にか22世紀の春塵 無 子

夏雲システムを使用し、兼題「春塵」
 「本」で行われました。五月は吟行を予定しています。参加希望の方はご連絡ください。

kokomiya2003@yahoo.co.jp (青年部・三宅)

初心者講座 第二期

第一回〜二回

はじめてよ桜吹雪の母の忌は 栗原 正子
 花吹雪どこかがいつも不明なり 山崎 幸子
 幼児と喃語の会話麦の秋 矢野 忠男
 飛花落花タイムスリップしそうな夜 萩野由美子
 こでまりの四方へ花を配りけり 横須賀弘子
 青空床屋はポランテア藤の花 秋山 綾子
 つくしんぼつんつくべこりベレーの子 宮原 青佳

第一期のメンバーの熱意から、新メンバーを加えての第二期講座ということになりました。並木邑人会長にも開講の挨拶に来て頂き、苦い言葉こそ一番身になると励ましのお言葉を頂きました。お互いに敬意を表しつつ句評をする楽しさも毎回わっています。現在怪我で一名お休みですが、総勢八名で出発、途中からの参加も歓迎です。

（羽村美和子 記）

《会員・会友の近況》

- ・「全国技能授業大会」2023教育の力」短歌の切れの授業で、国語部門のチャンピオンに。その後各部門のチャンピオン達が競う全国NO1講師決勝戦で、準グランドチャンピオンになりました。
- （片岡 秀樹）
- ・施設に入っています。車椅子でやつと移動している状態です。
- （内田 庵茂）
- ・芥川賞とAIが話題になっているがAIで俳句も作れる。あるソフトを入力してみたがいまいち。ただ、途中で詐欺まがいのウイルス感染警報が突然出てきてシャットダウン。ソフト選びには要注意。
- （高橋 節夫）
- ・最近しみじみと「俳句は凄い文芸」と実感しています。
- （島田 翠松）
- ・昨年末に入会。まだ何も分からずにはいますが、ゆっくりと慣れていければと思います。
- （渡邊マミヲ）
- ・最近とみに減りたる記憶力をひしひしと感じております。
- （菅ノ谷文字子）
- ・雛祭りの日、中山法華経寺へ散歩。本堂の玄関広間でプラスバンドの演奏会。学生さんたちの熱演に癒やされた。
- （鹿兒嶋俊之）

- ・病気のせいとか、歳のせいとか俳句に元気がなくなつてしまいました。(小林 実)
- ・老いてますますひきこもり、自然の移りゆくさまも、日本社会の動きも世界情勢も、国際情勢もテレビの画像で確認。しかし、真実には遠いのかもれません。情報とは操作されるものだから。(高桑婦美子)
- ・投句された皆様のお句を見せていただくのが楽しみです。(佐藤 浩子)
- ・新型コロナウィルス五類へ、やっと普通の生活に。長かつたと思います。これから本格的に句作に専念できそう。(鈴木 房州)
- ・今年も天候不順で、近所の公園の桜を散歩途中に見るだけでした。(佐藤 直子)
- ・四月半ばになって漸く清水公園の桜も満開に。花見客も満員続きで久しぶりに露天商も盛況で活気に充ち溢れていました。やっぱり桜は花の王様です。元気を貰いました。(椎名 鳳人)

図書紹介

■句集「レクイエム」 千葉 信子

令和六年三月三日刊

ふくしまをわけあふやうに桃を剥く
砂の風砂にかへして沖繩忌
レクイエム歩く速さで寒に入る

掲示板

《会員・会友異動》

- 逝去 (会員) 松本静顕
- 退会 (会員) 中澤一紅、沼山美津江、久野康子

●新会員・新会友

- 歌代 美遥 (会員) 星野高士紹介
- 大川佐多子 (会友) 高木一恵紹介
- 福山ヒデ子 (会友) 高木一恵紹介
- 三谷 徹 (会友) 高木一恵紹介

●俳名変更

- 柴田洋吾 ↓ 柴田洋郎
- 上杉良身 ↓ 福浦村民

《令和六年度第二回幹事会》

日時 令和六年五月二十一日(火)午後一時
場所 船橋市勤労市民センター
議題

- 一、令和六年度総会・俳句大会の結果、会計報告
- 二、春の吟行会(千葉市動物公園)の結果、会計報告
- 三、秋の吟行会について
- 三、創立四十五周年記念俳句大会について(素案)
- 四、一般社団法人現代俳句協会(本部)の動向について
- 五、各地区協会総会・俳句大会について
- 五、神奈川県・多摩・都区出席者
- 六、強化部の活動報告
- 七、初心者講座について
- 八、会報一五三号について
- 九、各部門の昨年度のコストダウン実績・今年度の計画
- 十、監査役欠員について
- 十一、各研究会の状況について

十二、その他

- ① 令和六年度後期・令和七年度前期予定について
- ② 会員・会友動静
- ③ 次回幹事会 八月二十日(火) 予定
- ④ その他

□□事務局・編集部だより□□

●暦を繰っていたら、こんな言葉に出会いました。「いい人/いい雨/いい天気/みんな私中心」「貴方が感じている虚しさこそ真実の世界への強烈な憧れなのです」ハツとしますが、見方を少し変えれば俳句にも新たな世界が飛び込んで来るかもしれません。今年度も総会・俳句大会・春の吟行会と予定通り行われました。皆様方のご協力に深く感謝申し上げます。

現代俳句千葉 第一五三号

令和六年六月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 並木 邑人

現代俳句千葉編集部

〒278-0037 野田市野田

六七七-11A二二五

木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局

〒277-0084 柏市新柏二-13-16

岡田 春人

TEL・FAX 〇四-七六一-一六三九